慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『ソドム百二十日』における百科全書的世界と読者
Sub Title	Le lecteur dans le monde encyclopédique des Cent Vingt Journées de Sodome
Author	真部, 清孝(Manabe, Kiyotaka)
Publisher	慶應義塾大学フランス文学研究室
Publication year	2009
Jtitle	Cahiers d'études françaises Université Keio (慶應義塾大学フランス文学研究室紀要). Vol.14, (2009.) ,p.17- 31
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11413507-20091201-0017

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『ソドム百二十日』における百科全書的世界と読者

真部 清孝

奇怪なテクスト

『ソドム百二十日』は、その形態からして奇怪なテクストである。まず、それは未完成のままに放擲された作品として読者の目の前にあらわれる。作品が未完成であることは明白であり[1]、その証拠は枚挙にいとまがない。執筆がほぼ完了していたと思われる「序論」と「第一部」の最後には手直しのための覚書が添えられ、この種の備忘的覚書はテクストのいたるところに散見される。また、「第二部」のタイトル部分には「草案（Plan）」（311）という語が付され[2]、それ以降は物語の骨子が箇条書きとなっている。

このような作品の不完全性もさることながら、『ソドム百二十日』の奇怪さは、このテクストが属するジャンルの曖昧さにも由来する。はたして、この作品は小説なのであろうか。たしかに、『ソドム百二十日』のように複数の文体が混在する不均質な構成を許容するジャンルは、小説しかあり得ないだろう。アニー・ル＝ブランは言う。「実際、ここにあるのは、出だしは歴史小説のようでもあるが、演劇的な構造を導入しながら哲学的対話へと変容し、そして簡素化されて目録となり、ついには犠牲者と生存者とを記録した明細表で終わる、そのようなテクストなのである[3]。」「歴史小説」、「演劇」、「哲学的対話」、「目録」、「明細表」と融通無碍に変容するスタイルを意識してか、『ソドム百二十日』の話者も、このテクストのことを呼ぶのに「物語（histoire）」（15）、「小説（roman）」（24, 70）、「日誌（journal）」（77, 311, 328, 347）、「話（récit, récits）」（32, 39, 40, 201）、「回想録（mémoires）」（40）、「雑録（recueil）」（181, 185, 302）、「劇（drame）」（70）と、さまざまな呼称を用いている。

歴史的な背景から説きおこされ、物語的な肉付けが十分にほどこされている「序論」と「第一部」、それとは対照的に、創作ノートさながら物語のプロットが日付や数字とともに整然と列挙されている「第二部」、「第三部」および「第四部」。いかなる力学によって、このような不均質な構造が生み出されたのであろうか。

情欲の大全

まずは、『ソドム百二十日』の物語構成を見ておこう。物語は、四人のリベルタン（ブランジ公爵、司教＊＊＊、キュルヴァル法院長、徴税請負人デュルセ）によって前代未聞の性の狂宴が企画されるところから始まる。「序論」では、この狂宴の趣向、参加人員、プログラムなどがおもに三人称の語りによって紹介される。「黒い森」の奥深く、デュルセの所有になるシリング城における、十一月から翌年二月にかけての百二十日間におよぶ狂宴の模様は、「日誌の形式で（en forme de journal）」（77）で記述され、「第一部」が

[1] あの有名な巻紙状の浄書原稿に記されているように、現在われわれが目にしている『ソドム百二十日』のテクストは 1785 年の秋に脱稿されたものである。それ以降、1789 年のバスチーユ襲撃の際にこの浄書原稿がサドの手元から失われるまでの期間、テクストにはいかなる改訂もほどこされていない。この大革命直前の時期、サドは『アリーヌとヴァルクール』、『ジュスチーヌ、あるいは美徳の不運』、『ウジェニー・ド・フランヴァル』を執筆するなど旺盛な創作欲を示しているにも関わらずである。このようなことから、未完成の状態が、作者の望んだ『ソドム百二十日』の最終的な形態ではないかと推測する論者もいる（cf. Mladen Kozul, *Le Corps dans le monde. Récits et espaces sadiens*, Louvain-Paris-Dudley, Éd. Peeters, 2005, première partie, chap. 4 « Espace du roman, corps du récit : le morcellement des *Cent Vingt Journées de Sodome* », pp. 60-88）。

[2] 『ソドム百二十日』からの引用にはプレイヤッド版を用いる（Sade, *Œuvres*, Paris, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, t. I, 1990）。この論文でなんらの断りもなく引用の後にアラビア数字が記されている場合は、このプレイヤッド版のページ数である。

[3] Annie Le Brun, *Soudain un bloc d'abîme, Sade*, Paris, Jean-Jacques Pauvert, 1986, p. 42.

十一月、「第二部」が十二月、「第三部」が一月、第四部が二月の報告にあてられる。日誌形式の部分では、売春業界の古株で、情欲（passions）のことなら知らぬこととてない四人の語り女（historiennes）による回想的な物語が展開され、その物語に触発されたリベルタンたちの行動もあわせて記述の対象となる。物語的な肉付けがなされている「第一部」では、語り女（語り女は月番制で、十一月はデュクロの担当）による回想部分が一人称[4]、シリング城内での出来事が三人称で叙述される。それに対し、物語的な肉付けがなされていない「第二部」以降では、情欲にまつわるエピソードが三人称によって淡々と箇条書きにされている。これら情欲にまつわるエピソードは、読者に以下のようなかたちで提示される。

> 四人の女たちはすべて、放蕩のうちでももっとも度外れな逸脱行為を自分たちが人生で経験したさまざまな出来事に託して語ることができるのであった。その手順としては、最初の女は、例えば、自分の身の上に起こった出来事を語りながら、そこにもっとも単純な情欲ともっとも平凡でありふれた逸脱行為を百五十種類織りこみ、二番手の女は、同様の枠組みで、一人ないし複数の男と一人ないし複数の女とのあいだのより奇抜な情欲を同じ数だけ語る。三番手の女も同じく、もっとも犯罪的で、法や自然、そして宗教をこのうえなく蔑ろにするような偏執的行為百五十種類を自分の物語に挿入し、［中略］四番手の女は、自分の一生の出来事とともに、百五十種類のさまざま責め苦を微に入り細を穿って物語る。（39-40）

つまり、総計六〇〇にのぼるエピソードが百二十日間で、一日平均五つの割合で語られるのである。

『ソドム百二十日』の最初の信頼するにたる版を校訂したモーリス・エーヌは、サドによる情欲の「体系的な分類[5]」、「性的逸脱行為の分類を目指した最初の実証的な試み（聴罪司祭たちの試みは別にして）[6]」に賛嘆の念をしめしている。情欲の総覧をめざすサドの試みは、博物学をモデルとした分類学的思考の一種であり、それは百科全書的性格をも有している[7]。

学芸の進歩にともなう知識の増大は、必然的にこれら知識の集積、および分類を要請する。十八世紀においては、言語、思想、学問、芸術、技芸等々、さまざまな分野で多くの辞書・事典類が出版されているが[8]、そこには、学者や専門家だけではなく、ヴォルテール、ディドロ、ドルバック、ルソーといった文学者や「哲学者」が数多く協力者として名をつらねている。「哲学者」としてのサドも、彼なりに風変わりではあるが、情欲に関する百科全書の編纂を試みるのである。それが『ソドム百二十日』なのだが、もちろんこのテクストは事典とは銘打たれていないし、そのような体裁もそなえてはいない。しかしながら、そこには当該分野についての知識を可能なかぎり蒐集し、分類しようという意欲がみなぎっている。四人の語り女が語る情欲のエピソードについて、「序論」では次のような説明がなされる。

> 放蕩にともなう多種多様な逸脱行為とその枝葉や付属物の一切合切、つまり、道楽者の言葉で情欲と呼ばれるもののすべてを、微に入り細を穿って

---

[4] 娼婦による一人称の語りというのは、当時のポルノグラフィーの常套的な形式である。この点に関しては次の文献を参照： Valérie van Crugten-André, *Le roman du libertinage (1782-1815). Redécouverte et réhabilitation*, Paris, Honoré Champion, 1997, chap. I « Le roman de la prostituée », pp. 105-219.

[5] Maurice Heine, *Recueil de confessions et observations psycho-sexuelles*, Paris, La Musardine, 2000 (première éd. 1936), p. 17.

[6] Maurice Heine, *Le Marquis de Sade*, Paris, Gallimard, 1950, p. 278.

[7] 『ソドム百二十日』の百科全書的性格については、次の文献を参照：Philippe Roger, *Sade. La philosophie dans le pressoir*, Paris, Grasset, 1976, cf. pp. 76-80 ; Marcel Hénaffe, *Sade. L'invention du corps libertin*, Paris, PUF, 1978, chap. 2 « Tout dire ou l'encyclopédie de l'excès », pp. 65-95 ; Emmanuelle Sauvage, *L'œil de Sade. Lecture des tableaux dans Les Cent Vingt Journées de Sodome et les trois Justine*, Paris, Honoré Champion, 2007, cf. pp. 47-72.

[8] この点に関しては次の文献を参照：Jean Marie Goulemot, « Dictionnaires et encyclopédies de et sur le XVIIIe siècle », *Critique*, numéros 608-609, janvier-février 1998, pp. 1051-1063.

順序立てて語らせようというのであった。［中略］もし、これらの逸脱行為を記述し、詳細に分析できる者がいるならば、それは風俗に関するきわめて優れた、おそらくもっとも興味深い研究のひとつとなるであろう。したがって、まず必要なのは、あらゆる放埒について報告できる人物、それを分析、展開、詳述、さらには段階ごとに順序立てて示しながら、そこに話の面白さを付け加えることができるような人物を探すことである。（39）

ここには、情欲に関する知見を網羅しようという意志が感じられる。ありとあらゆる情欲を「微に入り細を穿って（avec les plus grands détails）」記述し、「順序立てて（par ordre）」提示する。すなわち、「分析（analyser）」、「展開（étendre）」、「詳述（détailler）」をおこない、「段階ごとに順序立てて示（graduer）」そうというのである。網羅、分析、分類、まさに辞典や百科全書の方法論である。ただ違うのは、そこに「話の面白さ（l'intérêt d'un récit）」が付け加わるということ、つまり、すべてはフィクションによって叙述されるという点である。

物語作法と分類学

『ソドム百二十日』というテクストには、すべてを網羅し、分類しようという百科全書的意志と物語作法とのあいだの緊張関係や軋みを見て取ることができる。

「すべてを語り、すべてを分析する（tout dit, tout analysé）」（69）とは、四人の語り女たちに要請される最重要事項である。実際、一番手の語り女であるデュクロは四人のリベルタンに対し、「しかしながら、皆様方からすべてを語る（tout dire）ようにとの命をうけておりますので、わたくしは従うことにいたします」（145）と恭しく述べている。情欲に関して知り得た情報のすべてを網羅し、提示する、それはどのような方法によってなのか。辞書や事典ならば、項目の配列は、それがいかに恣意的な配列法であろうともアルファベット順によるしかないであろう[9]。もちろん、サドはそのような配列

[9] Cf. Béatrice Didier, *Alphabet et raison : le paradoxe des dictionnaires au XVIIIe*

法を採用しない。まず彼は、博物学の分類方法よろしく、諸々の情欲を四つの「綱（classes）」に分類する。「第一綱（première classe）」には「単純な（simples）」情欲（77）が、「第二綱（seconde classe）」には「複雑な（doubles）」情欲（311）が、「第三綱（troisième classe）」には「犯罪的な（criminelles）」情欲（328）が、「第四綱（quatrième classe）」には「殺人をともなう（meurtrières）」情欲（346）が分類され、諸々の情欲は「段階ごとに順序立てて示」される。これら四つの「綱」は、『ソドム百二十日』の「第一部」から「第四部」のそれぞれで扱われ、各々の「部」の冒頭にはそのことを明示する見出しが付けられている。例えば、「第三部」の見出しは、「第三綱に属する、あるいは犯罪的な百五十の情欲（LES CENT CINQUANTE PASSIONS / DE TROISÈME CLASSE, OU CRIMINELLES）」という言葉で始まり、これらの情欲の提示に「一月の三十一日間が費やされる（COMPOSANT TRENTE ET UNE JOURNÉES DE JANVIER）」旨が明記されている（328）。大きく四つに分類された「綱」は、さらにその「綱」に充てられた月の日数分だけ下位分類がおこなわれ、そしてまた、一日につき平均五つのエピソードが語られるわけであるから、さらなる下位分類がおこなわれていることになる。四ヶ月にわたり、四人の語り女たちによって語られる総計六〇〇にのぼる情欲の分類と提示の方法は、博物学の分類図や『百科全書』の「知識の系統図」と同様、ツリー状の構造を持っていることになる。

このような分類作業はテクストの隅々にまで徹底されており、その徹底ぶりは、読者が分類の系統樹のあいだを迷走しないようにとの次のような配慮となってあらわれている。

しかしながら、このような題材にあまり馴染みのない読者は、話題となっている情欲と語り女の人生の単なる情事や出来事とを混同してしまうおそれがあるので、とくに注意して余白部分に印をつけ、その上に当該の情欲に与えるべき名称を記載することにした。この印が付されるのは、当該の情欲が語られるエピソードが始まる行の余白で、そのエピソードが終わる

siècle, Paris, PUF, 1996.

ところでは必ず改行がおこなわれるようにする。（69-70）

『ソドム百二十日』は作者の生前には出版されることがなかったので、このようなレイアウト上の工夫は実現されなかったわけだが、読者への同様の配慮は他にも見られる。登場人物の一覧表が「序論」の最後に掲げられているが、それには次のような説明が付されている。

しかしながら、この種の劇には数多くの登場人物が出てくる。序論のなかで注意深く彼ら全員をひとりひとり描写したわけだが、ここに各登場人物の名前、年齢を含んだ一覧表を掲げて、彼らの肖像画を簡単に描いておく。物語のなかで不明な名前に出会ったならば、この一覧表にあたり、そして、もしこの簡単な描写だけでは話が思い出せないようであれば、さらに前述の詳細な肖像画にあたっていただきたい。（70）

このような読者への配慮は、マニュアルや辞書類のそれを思わせる。「序論」の最後に掲げられた登場人物一覧表が辞書の凡例、「第一部」以降が辞書の本文といったところであろうか。

辞書の本文にも見立てることができる「第一部」以降の部分だが、前にも述べたように、そこではアルファベット順の配列法が採用されることはない。無味乾燥な配列にかわって、そこでは物語の論理が優先される。

さらに、読者にあらかじめ承知しておいてもらわなければならないことがまた一つ。これら六〇〇種類の情欲を、語り女たちの話のなかに溶け込ませてしまったということである。もし、それらを物語の中に組み込まず、ひとつひとつ独立したかたちで詳述したならば、あまりにも単調なものとなってしまったであろう。（69）

情欲を「ひとつひとつ独立したかたちで詳述」することの「単調（monotone）」さとは、言うまでもなく辞典類の単調さである。辞書の論理と物語の論理がせめぎ合いながら、『ソドム百二十日』というテクストを形づくっているのだ。物語的な肉付けがほどこされている「第一部」では物語の論理が優勢で、

「第二部」以降では辞書の論理が優勢となっている。

「第二部」以降では、アルファベット順の配列法こそ採用されていないが、さまざまな情欲が日付や数字とともに整然と列挙され、それは辞書のページを連想させる。例えば、十二月十日の項の次のような記述を見てみよう。「十日。四六．彼は娘 A と娘 B に排便をさせ、娘 B には娘 A の大便を、娘 A には娘 B の大便を食べるよう強要する。そしてふたたび、彼女たちは二人とも大便をし、彼はこれら二人の大便を食する。」（315）最初に日付が記され、その次に「四六」とあるのは、十二月に語られる百五十あるエピソードの通し番号である。また、エピソードの主語は「彼（il）」という無機質な人称代名詞であり、この「彼」が何者なのかはもちろん特定されていない。記述の無機質さは、「娘 A」、「娘 B」というアルファベットの使用によってさらに強調される。変態的な情欲が、無機質なディスクールによって次々と提示されていくのだ。

また、語りの面から見ても、「第一部」と「第二部」以降とでは対照的である。おもに語り女による一人称の語りによって物語が展開される「第一部」に対し、「第二部」以降では、語り女から言葉が奪われ、日誌形式による三人称の素っ気ない記述、情欲の総覧とでも呼べるものが坦々と続くことになる。『ソドム百二十日』という未完成のテクストが持つ不均質な構造は、以上のような力学、辞書の論理と物語の論理のせめぎ合いという磁場によって形成されたものなのである。

情欲の系統的な分類とその詳述をめざす『ソドム百二十日』は、ある意味でディドロとダランベールの『百科全書』の精神を受け継いだものだといえよう。『百科全書』の「序論」では、『百科全書』の各項目と「人間知識の系統図」の関係が次のような比喩をもって語られている。

それは一種の世界全図であり、主要な国々、それらの位置と相互の依存関係、ある国とある国とをつなぐまっすぐな道などを示さねばならない。だが、その道というのは、しばしば数多くの障害物によって遮られており、そのことを知っているのは、それぞれの国の住人や旅行者だけであり、個別のきわめて詳細な地図でしかそれを示すことができない。これら個別の

地図が『百科全書』の種々の項目にあたり、「系統樹」あるいは「図表化された体系」が世界全図にあたるものになるであろう[10]。

この比喩を『ソドム百二十日』に当てはめれば、「人間知識の系統図」にあたる地球全図が情欲の分類、『百科全書』の各項目にあたる個別の地図が語り女たちが語る個々のエピソードということになるであろう。この『百科全書』からの引用部分では、比喩のモチーフとして地図や旅が用いられているが、それは読者を『百科全書』という広大な未知のフィールドへと誘うためのレトリックとなっている。サドも同様に、読者をおぞましくもある未知の領域へと誘う。

「読者」の存在

実際、『ソドム百二十日』には読者を意識した惹句がいたるところに鏤められている。意外なことだが、あまりの暴力性ゆえに読者を拒絶しているかに見えるこのテクストに、読者への呼びかけが数多く存在しているのだ。ごく明示的なものだけを拾い出してみても、その数は約四十にのぼり、しばしばそこで読者は「あなた（vous）」ではなく「君（tu）」と呼ばれ、親しげに声をかけられる。そこには、いかなる読者戦略が隠されているのであろうか[11]。

これら「読者」への呼びかけは、当然のことながら、物語的な肉付けがなされている「序論」と「第一部」に集中しており、「第二部」以降では影をひそめている。「序論」では、「第一部」以降で展開される物語、およびそこで提示される情報を理解するための予備知識が読者にあたえられる。マニュ

[10] « Discours préliminaire », *Encyclopédie, ou dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers*, t. I, Paris, 1751, p. XV.

[11] 『ソドム百二十日』における「読者」の意味については次の文献を参照：Jean-Christophe Abramovici, « *Les Cent Vingt Journées de Sodome* : lecture et isolisme », *Lecture, livres et lecteurs du XVIIIe siècle*, Actes publiés sous la direction de Jean M. Goulemot, Université de Tours, *Cahiers d'histoire culturelle*, numéro 12, 2003, pp. 95-103.

アルや辞書でいえば、それらを使用する読者が途惑わないよう冒頭に置かれた凡例や注意書きの役割を果たすのがこの「序論」であるから、読者への配慮には遺漏がない。四人のリベルタンとその他の登場人物たちの肖像画と一覧表、狂宴計画の概略や日程、舞台となるシリング城の内部構造など、読者の理解を助けるための情報開示が十分になされている。それはまさに教育的配慮とでも言えるもので、『ソドム百二十日』とは、その副題が示すとおり『放蕩の学校（*l'École du libertinage*）』でもあるのだ。「序論」を読み進む読者は、いわばこの「放蕩の学校」の扉の前に立っていることになる。その読者に、シリング城での「規則（Règlements）」が通知される。

本題に入る前に、読者にはそれら［規則］について是非とも知っておいてもらわねばなりません。われわれはすべてについて正確に描写してまいりましたので、いまや読者は気軽にそして官能にひたりながら物語の筋を追えばよろしいのです。読者の理解を邪魔したり、記憶を妨げたりするものなど、もはや何ひとつないのですから。（59）

「放蕩の学校」の扉は半開きとなっており、そこからは内部を垣間見ることができる。官能の予感に胸を躍らせながら、読者はそこに足を踏み入れることになる。しかし、すべての読者がそこに受け入れられるわけではなく、読者は選抜の篩にかけられる。

以上の説明から、信心深い方には前もって警告しておきます。憤慨なさりたくないのであれば、この著作をすぐにでも放擲なさってください。なぜなら、すでにお見通しのように、この物語の筋は慎み深いものとはとても言えませんし、その筋が展開されるとなるとますます慎みないものとなることは、あらかじめ請けあっておきますので。（40）

この関門をくぐり抜けた読者は、当然のごとく官能的な描写を期待するわけだが、そのような期待を次のような惹句がさらに煽りたてる。「友である読者よ、今こそ、この世界が存在して以来もっとも淫らな物語に心と頭の準備

をしておいていただきたい。斯様な作品は、古代にも現代にもおおよそ類を見ないものなのですから。」（69）読者の期待は否応なく膨らんでいくわけだが、その期待の実現は何度となく先延ばしにされる。

> しかしながら、彼ら［四人のリベルタン］の趣味について、今までのところ細部にまで立ち入ることはできませんでした。ここでそれらを明るみに出してしまうと、この作品の趣向や筋書きが台無しとなってしまうからです。［中略］その謎は、続きで明らかとなるでしょう。（32）

ここに見られるのは、期待を煽りつつも、それをはぐらかし、読者の興味をひっぱってゆくポルノグラフィーの常套的なレトリックである。

同様のレトリックは、物語が始まる「第一部」でもひきつづき用いられる。「第一部」の多くの部分は、語り女デュクロによって語られているので、彼女の言葉から見ていこう。情欲に関する知り得た情報のすべてを提供するよう四人のリベルタンから要請されている彼女は、次のように言う。「あなたがたが私に唯一要求なさっているのは、ありのままの真実ですので、この点では、お褒めにあずかれるものと自負しております。」（80）しかしながら、リベルタンたちの要求水準は高く、彼らを満足させるのは容易なことではない。デュクロの語り口に関し、厳しい注文がつけられる。「言っておいたではないか。細大漏らさず枝葉末節にいたるまで話をしなければならないと。［中略］また、われわれはお前たちの話から感覚の刺激を得られるものと期待しているわけだが、ほんの些細な細部の事柄がそのために大いに役立つのだよ。」（84）官能を刺激しようと、語り女の話に一心に耳をかたむけるリベルタンたちが座しているのは、語り女の「話を一言も聞き漏らすことがないような（à même de ne pas perdre un mot de sa narration）」（56）かぶりつきの特等席。このリベルタンたちと同じ位置にいるのが、『ソドム百二十日』というテクストを読みすすむ読者なのだ。語り女の話に耳を澄ませ、物語の展開に期待を膨らませる読者。リベルタンの姿にテクストを前にした読者の姿がオーバーラップする。デュクロの巧みな話術は欲望をかき立てるが、その欲望がすぐに満たされることはない。デュクロは言う。「辛抱なさってお待

ちくださいませ、猊下、あなた様がみずからわたくしに要求なさった順序にしたがってお話をさせていただけないでしょうか」（167）。リベルタンとともに、読者はお預けを食うこととなる。

ここで話の「順序（ordre）」が強調されているが、この「順序」とは、『ソドム百二十日』というテクストに内在する秩序、情欲の百科全書としての分類への意志を言い表してもいる。実際、「第一部」のいくつかの箇所では、このような「順序」へのこだわりが表明されている。

> 残念ながら、これらの題目について話すためにわれわれがみずからに課した順序があるので、おそらく読者に喜んでいただけるであろうこの宗教儀式の細部については、それをお伝えするのはしばしのあいだ見合わさざるを得ません。しかるべき時がくれば、読者に明らかにすることもできるでしょう。（143、下線は筆者）
> われわれの計画の順序もあって、この猥褻な懲罰について描写することができないのは残念至極ではありますが、読者の皆様は気を悪くなされませんように。（148、下線は筆者）

話の「順序」を楯にとり、読者の期待の実現はつぎつぎに先延ばしにされる。「もう少しの辛抱です、友なる読者よ、やがて何もかも明らかにすることになるでしょう。」（247）

ところで、ほんとうに読者は全てを知ることができるのだろうか。『ソドム百二十日』の「第一部」を読みすすむ読者は、語り女の話に耳をかたむけるリベルタンたちと同じ位置にいると書いたが、厳密に言うと、それは間違いだ。リベルタンたちは知っていて、読者には知らされない事柄もある。リベルタンたちは、しばしば自分たち専用の「秘密の小部屋（cabinet secret）」あるいは「衣装部屋（garde-robe）」と呼ばれる場所に姿を消す。彼らは犠牲者を指名し、ともにこの部屋に向かうのだが、犠牲者の叫び声や彼らの雄叫びが間欠的に漏れ聞こえるのみで、部屋のなかで何が起こっているのか具体的に読者に知らされることはない。「あいかわらず、この地獄のような小部屋のなかで起こっていることを知ることは、私には出来ないのでありまし

た」（268）と、『ソドム百二十日』の語り手も素っ気がない。置き去りにされた読者は、あたかも目隠しされた状態で、「小部屋」から聞こえてくる叫び声に想像を逞しくするしかないのである。

読者への背信

読者は焦らされ、翻弄されながら物語の深みにはまり込んでゆく。そして、物語という衣が剥ぎ取られた「第二部」以降において、読者は『ソドム百二十日』というテクストがもつ剥き出しの暴力性と対峙することになる。「序論」と「第一部」であれほど頻繁におこなわれていた読者への呼びかけが、「第二部」以降では忽然と姿を消す。テクストのただ中にひとり放り出された読者は、情欲の無味乾燥な辞書的記述に目を走らせる。記述される情欲は、「複雑な情欲」、「犯罪的な情欲」、「殺人をともなう情欲」と読みすすめるにしたがい過激なものとなるよう配列がなされている。エスカレートする記述内容の暴力性もさることながら、その記述の形態にも、テクストのもつ暴力性がむき出しとなっている。例えば、「第三部」の「一月二十四日」の項を見てみよう。

> 一一三．彼は彼女から片耳を切り取る。［中略］
> 一一四．彼は彼女の両唇と鼻孔を切り裂く。
> 一一五．彼は、彼女の舌を吸ったり噛んだりした後で、熱した鉄棒をその舌に突き刺す。
> 一一六．彼は、彼女の手や足の爪を何枚かひき剥がす。
> 一一七．彼は彼女の指先を切り落とす。（342）

情欲とはほとんど無関係にさえ見えるこれらの記述だが、その暴力性の在りかを探ってみよう。まず、ここで用いられている動詞だが、「切り取る（couper）」、「切り裂く（fendre）、「突き刺す（percer）」、「ひき剥がす（arracher）」、「切り落とす（couper）」と、いずれも外科的な処置を思わせる。そして、その処置の対象となった身体の部位が、「片耳」、「両唇」、「鼻孔」、「舌」、「爪」、「指先」と陳列されてゆく。欲望の対象となる身体は、もはや統合された人

体ではなく、分離された断片として提示され、このように断片化された身体からは、そこに加えられた暴力の強度が想起させられる。暴力を行使する主体、つまり、各々の記述の主語には「彼（il）」という無機質な主語人称代名詞が用いられ、暴力のむかう対象は補語人称代名詞の「彼女に（lui）」によって指し示される。簡潔でほとんど機械的とも言える記述方法と、官能とはほど遠い記述内容の連続に辟易とする読者は少なくないであろう。

「第二部」以降の情欲の記述では、主語が「彼（il）」、目的語が「彼女（la, lui）」というふうに人称代名詞を用いる無機質なスタイルが標準となっているが、例外的に、目的語の部分に「あなた（vous）」という二人称の代名詞が用いられている記述が存在する。「二月十日」の項である。

> 五三．さる悪党は、また別の毒薬を用いて、あなたを想像を絶する苦しみのうちに死に至らしめる。その苦しみは、二週間続き、いかなる医者もそれについてなんら解明することはできない。このような状態にあるあなたを見舞いに行くことが、この悪党の最大の楽しみなのだ。
> 五四．さる悪党は、男にも女にも、これまた別の毒薬を用いる。その効き目たるや、あなたからは感覚が失われ、あなたはあたかも死んだような状態となる。まわりはあなたが死んだと思って、あなたを地中に埋葬してしまい、あなたは柩のなかで絶望のうちに死んでいく［以下略］。（355、下線は筆者）

ここで突如として現れてくる「あなた（vous）」という人称代名詞は、文法的には通常、不特定な人をあらわすものと理解すべきであろう。しかし、毒薬による殺害の対象となる無名の「あなた」とは、同時に、このテクストを読んでいる読者をも指し示している可能性がある。「第二部」以降、忽然と影をひそめていた「読者」への呼びかけが、まったく別のかたちでここでは復活している。「あなた」は毒を盛られ、感覚を失い、地中深く葬られるわけであるから、テクストのもつ暴力性が直接的に読者に向かっていることになる。引用部分の直前の箇所に、「これから話すのは、殺人と裏切り行為についてである」（354）という但し書きがあるが、ここで裏切られ、殺害され

るのはテクストを読んでいる読者自身なのである。

このような裏切りの徴候は、「序論」の部分ですでに顕れている。「第一部」以降で披露される六〇〇にのぼる情欲のエピソードについて、『ソドム百二十日』の話者が饗宴の比喩をもって語っている箇所がある。

> それは、まさしく君の食欲をそそる六〇〇皿のさまざまな料理が饗される素晴らしい宴の物語なのである。君は、その全てを食べようというのかね。おそらく、それは無理というものだ。しかし、このおびただしいい品数によって、選択の範囲はひろまったわけである。選択肢が増えたと喜んでいる君は、君を楽しませる接待役に苦情を言うはずもない。ここでも、同様にしてもらいましょう。気に入ったものを選び、他はうっちゃっておく。そして、残り物に関しては、それがお気に召さなかったという理由だけで文句を言わないように。他の方には、お気に召していただけるかもしれません。哲学者のように、悠然と構えていてください。(69)

上機嫌の話者は、贅を尽くした食卓を提供する「接待役（amphitryon）」として、読者のことを「君（tu）」と呼び、親しげに話しかける。読者の目の前に並べられた料理の数々は読者の感覚を刺激する。読者はそこから気に入ったものを手にとり、口に運ぶだけでいいというのだ。しかしながら、『ソドム百二十日』を読もうとする読者に、そのような選りどり見どりの選択がはたして可能なのであろうか。実際には、辞書の項目のごとく次々と記述される情欲のありさまを、供されるがままに否応なく飲み込んでいくしかないのではなかろうか。しかも、そこには毒が含まれている可能性がある。

このテクストには、読者に毒を盛るための罠が数多く仕掛けられている。『ソドム百二十日』の暴力性は、その内容もさることながら、このようなテクストをめぐる読者との背信的な契約関係にも由来するのである。